

島根県水産技術センター 漁況情報 令和3年9月1日発行

トビウオ通信 (R3 第7号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)
<https://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《令和3年度マアジ新規加入量調査結果速報》

マアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたので、その結果をお知らせします。本調査はその年に生まれたマアジの加入状況を早期に把握するために、平成15年以降毎年実施しているもので、今年で19年目となります。

参画機関は国立研究開発法人水産研究・教育機構（水産資源研究所）、鳥取県水産試験場、山口県水産研究センター及び島根県水産技術センターです。

結果の概要

- マアジ幼魚は、適水温帯(16～20℃)が広がる沿岸寄りの海域で多く採集されました。
- 調査結果を基に計算した今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、平成15年を1.00とすると0.90となり、昨年(1.35)と比べ低くなりました。
- 今年のマアジ0歳魚の漁獲量は昨年を下回ると推測されます。

マアジ幼魚の採集結果と分布状況

令和3年(2021年)5月18日から6月22日にかけて長崎県五島列島沖から鳥取県西部の海域における合計107地点でマアジ幼魚(令和3年(2021年)生まれ)を対象とした中層トロール網を用いた漁獲調査を実施しました。その結果、尾叉長2～4cmサイズを主体に合計15,205尾(1曳網当たりの平均採集尾数:142尾)が採集されました(図1)。

採集されたマアジ幼魚は、適水温と考えられる16～20℃(水深50m)の水温帯に多く分布していました。分布範囲は例年同様、五島列島から隠岐諸島の広

範囲に及び、1 曳網当たりの採集尾数は島根県から鳥取県の沿岸寄りに多く、九州地方から山口県にかけて分布密度が低くなりました。

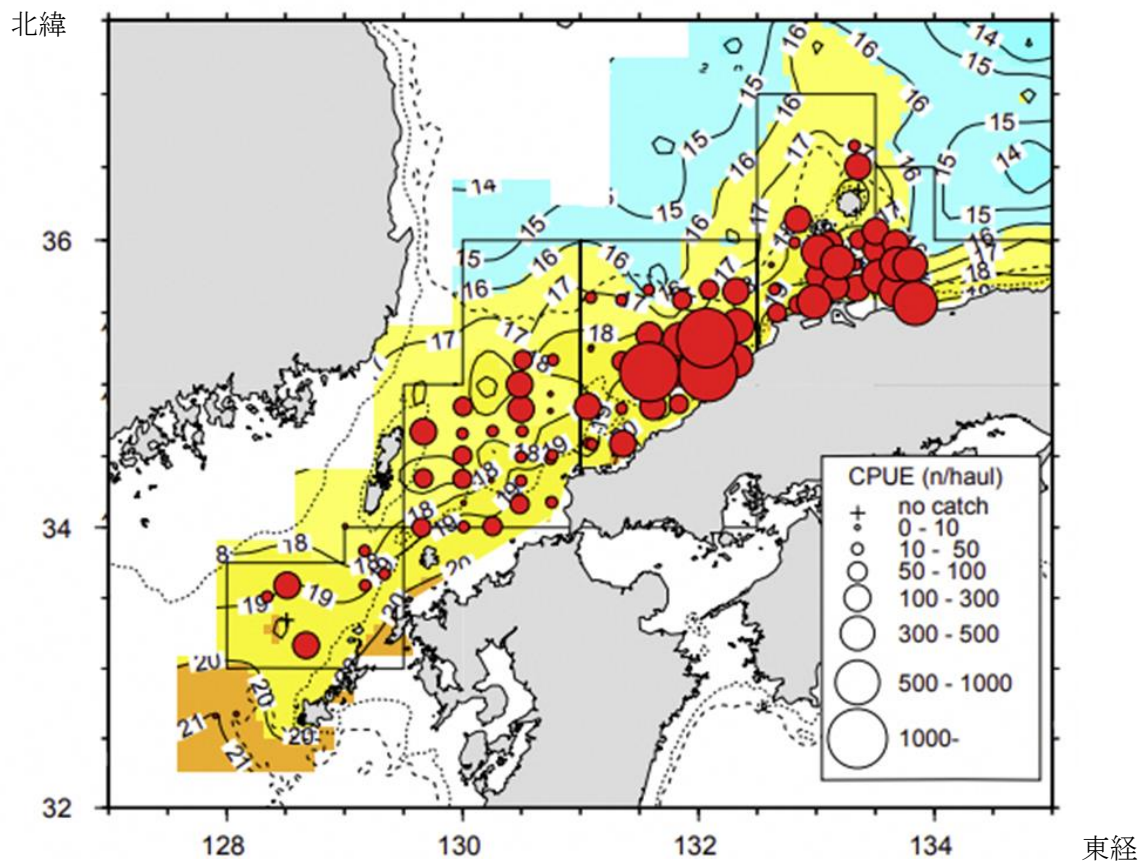


図1 マアジ新規加入量調査における 2021 年のマアジ幼魚の採集結果
 円の大きさはマアジの採集尾数の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。
 水深 50m の水温分布については、青色が 16°C 以下、黄色が 16~20°C を表し、図
 中の数字は水温を示す。

(資料：国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所作成)

マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の分布量と調査海域の水深 50m の水温分布を基にして算定したマアジ幼魚の加入量指数 (来遊量の多さを表します) は、平成 15 年を 1.00 とすると、今年は 0.90 となり、昨年 (1.35) と比べ低くなりました (図 2)。今年の加入量指数は調査を開始した平成 15 年以降で見れば、過去 18 年間 (平成 15 年~令和 2 年) の平均 (1.11) よりも低い値となりました。この加入量指数は、その年の 6 月から 12 月までの間に境港でまき網漁業によって水揚げされるマア

ジ0歳魚の漁獲尾数とある程度の相関がみられることから、今年（R3）の山陰沖におけるマアジ0歳魚の漁獲量は昨年（R2）を下回ると推測されます。

マアジは小型の0歳魚を漁獲するよりも、1年後に成長してから漁獲した方が単価は高く、資源を有効に活用できます。しかし、夏季には他の浮魚類（イワシ類やサバ類）の漁獲が減少するため、マアジ0歳魚が集中的に漁獲される傾向があります。単価の低い小型魚を多く獲り過ぎてしまうと、将来の単価の高い大型魚の漁獲量が減るだけでなく、産卵親魚の減少にもつながるため、過度な漁獲圧力がかからないよう適切な管理を行っていくことが大切です。

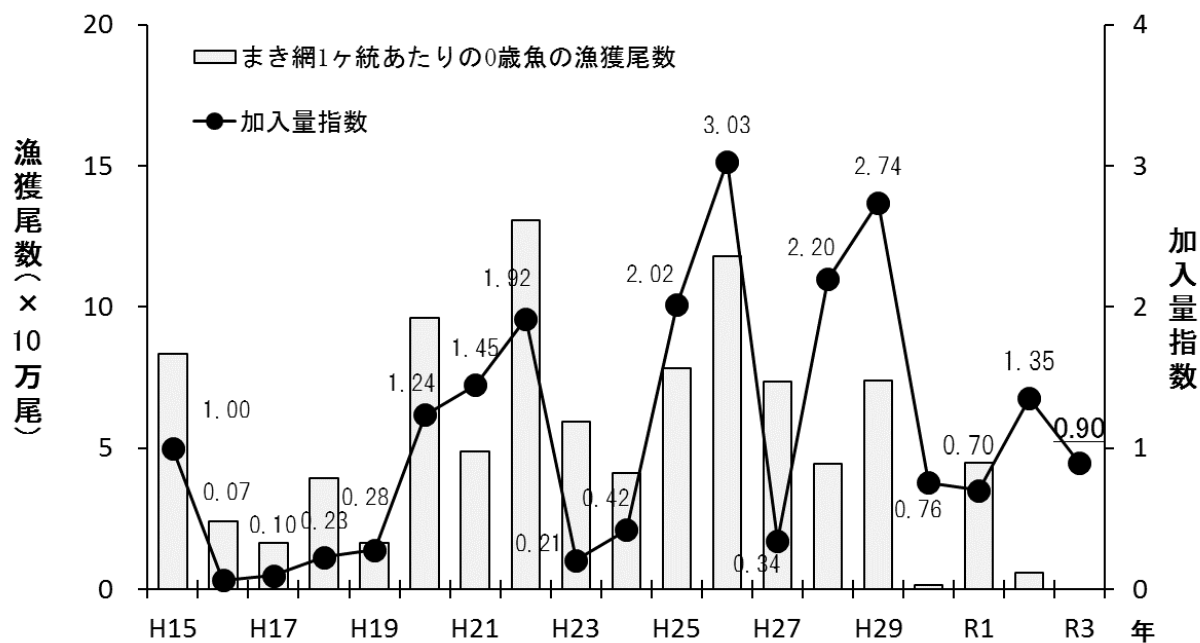


図2 マアジ幼魚の加入量指数と6月～12月の境港におけるまき網1ヶ統当たりのマアジ0歳魚の漁獲尾数（鳥取県水産試験場集計）の動向